



すべての人に やさしい世界に

AAR Japan [難民を助ける会]

野際 紗綾子 さん

1993年、当時高校生だった私は、カンボジアの内戦と虐殺についての歴史を読み、世界には、こんなに大変な状況下に置かれてきた人々がいるのかと驚きました。人は、生まれる国を選ぶことはできないのに、環境によって人生が大きく左右されるのは公平ではないと感じたのです。これをきっかけとして、身近なところでなにかできることはないかと、休日

に近隣の障害福祉施設でボランティア活動をはじめました。大学卒業後、しばらく外資系金融機関で働きましたが、格差や不平等への問題意識が高まり、2005年4月から、夜間大学院への通学と同時に、認定NPO法人AAR Japan [難民を助ける会]での勤務を開始しました。当会は、「憲政の父」と呼ばれた尾崎聖堂^{がくどう}の三女である相馬雪香によって1979年に設立された団体で、緊急支援や地雷対策に加え、障害分野の活動に力を入れています。2007年2月、チャリティ・コンサートの会場裏で相馬先生が「誰がなんと言おうとも、自分がやろうと思ったことをやり通しなさい。必ず助けてくれる人がいるから」と仰ってくださいました。その言葉と多くの方々の温かいサポートにより、国内外の支援活動にとりくんでくることができました。

同時に、そうした活動の現場で、多くの「不平等」を目の当たりにし、障害の有無にかかわらず、すべての人にやさし

▶車いす工房でソパノ工房長と打ち合わせ



い世界を築いていきたいという思いはさらに強まりました。日本国憲法、世界人権宣言、障害者権利条約で掲げられている「平等」は、果たしてどれほど達成されているでしょうか。実効性を高める必要性はこの上なく高くなっています。

2018年3月30日。今、私は、高校生の時に知ったカンボジアに初めて出張で来て、障害分野の活動の調整を行っています。当会は1992年にカンボジアで現地事務所を開設し、1993年にキエンクリエン職業訓練校を開校し、1994年に車いす工房を設立しましたが、その車いす工房は2006年に現地化し、カンボジアの障害当事者が中心になって運営するようになりました。設立から四半世紀がたち、施設や設備の老朽化が目立ちますが、工房長のソパノさんは、「今後は、車いすに改良を加え、啓発活動にも力を入れていきたいです」と抱負を語ってくださいました。

相馬先生は、尾崎聖堂の言葉をよく引用していましたが、「人生の本舞台は常に将来にあり」もその一つです。何を始めるにも、遅すぎることはない、人生これから、という思いで、これからも活動にとりくんでいきたいと思っています。

のぎわ さやこ / 1976年東京生まれ。認定NPO法人AAR Japan [難民を助ける会] 東京事務局のプログラム・マネージャー。2008年チャーマーサイクロン、2009年スマトラ沖大地震、2010年パキスタン水害など多数の緊急支援活動に従事。東日本大震災の際は発生2日後から被災地に入り、2年間にわたり東北事務所長を務めた。現在は、アジア地域の障害分野事業や国内の災害対策事業のマネージャーを務める。